

鯨 研 通 信

第 332 号

1980年 1月

財団法人 鯨類研究所 〒 135 東京都江東区越中島 1丁目3番1号 電話 東京 (642) 2888 (代表)



エーゲ海とイルカ

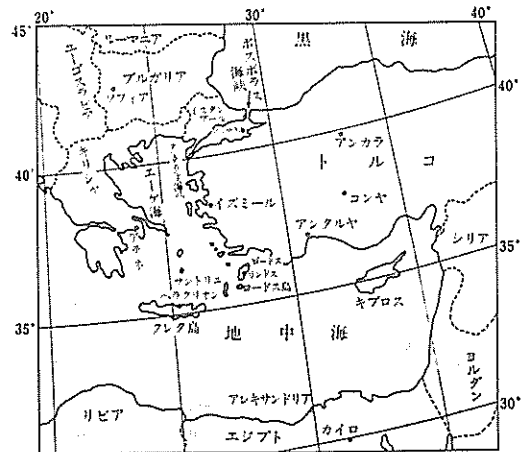
吉 原 友 吉

毎年数十万の人が、海外旅行に出掛けるが、夏になると特にエーゲ海の船旅の広告が目につく。一週間から十日位で、アテネを始めギリシヤ各地の遺跡を見物するほか、エーゲ海で一日乃至数日のクルーズ楽しむのが普通である。遊覧船はプール、ダンスホールなども備えた一万屯前後の船で、アテネ近くのピレエフス (Peiraeus) 港から出てサントリーニ、クレタ、ロードスなどの島々を巡航する。昼間はデッキで太陽を浴びながら紺碧に輝くエーゲ海を眺め、目的の島に着くと急いで遺跡を見物して掃船する。デロス (Delos) 島では風向きが悪いというので上陸できなかったが、このアテネ人の神殿には、海戦勝利の三段櫓船が納めてあり、劇場跡付近には、ドルフィンの家があって、その中庭には、ドルフィンの泳ぎ廻っているモザイクが残っている。その頭部には神々を表わす像が、手綱を持って操縦しており、中央には波や幾何学模様の大きな円が描かれ、この様式が、シリアのアラドスに起ったことが記されている (ギリシヤとエーゲ海 272p に依る)。

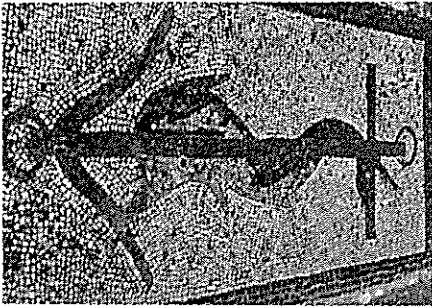
エーゲ海のほぼ中央に密集して環状に並んだキクラデス (Kyklades, 円環) 諸島は本土とクレタ島、小アジアを結ぶ中継地点として、新石器時代から大きな役割を果たしてきた。その一つデロス島は、前項でも触れたが、全ギリシヤの宗教の中心地であった。キクラデス諸島の南端に位置し、この島から百キロばかり南にあるサントリーニ (Santorine または テイラ Thera) 島は火山島で BC 1480~1450年頃大爆発を起し、現在は Therasia, Aspronisi などの小島と共に、カルデラを囲む形で残っていて、船が島に近づくと聳え立つ溶岩の赤茶けた山肌が海に迫り、崖の上には白亜の家並みが続き、崖の中腹は抉り取られたようになっているのがわかる。船はこの垂直に近い崖の下に着き、この崖

に造られた 580 段の急勾配の石段をロバに乗って登る。断崖の上に出ると、噴火によって出来た溶岩の島が真下に見え、すばらしい展望を恣にすることができる。この島の遺跡 West House から裸体の漁夫がシイラを吊上げているフレスコ画が出土しアテネの博物館に展示されている。またこの島の東方約 25km にあるアナファイ (Anafi) 島では高さ 250m の所にサントリーニ島の爆発で生じた大津波によって打上げられた厚さ約 5m の軽石の層が見られ、従って同じ津波が南方の約 100km 離れたクレタ島北岸 (クノッソス宮殿のある側) にも大きな被害を与えたという説もある (Parse-Carayannis 1973)。

シュリーマン (Heinrich Schliemann 1822—1890) の自伝「古代への情熱」は広く読まれているが、彼はトロイ (Troy 1871—3) とミケーネ (Mycene 1876) を発掘したのち、さらにクレタ (Krete) 島のクノッソ



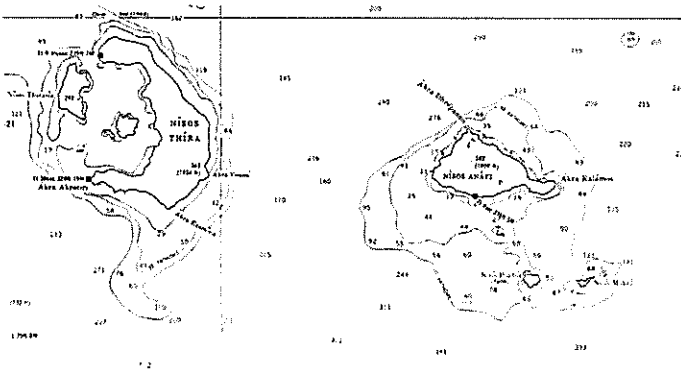
第 1 図 エーゲ海とその周辺



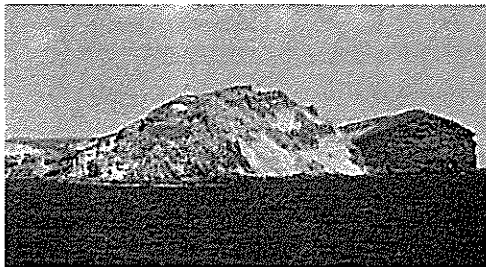
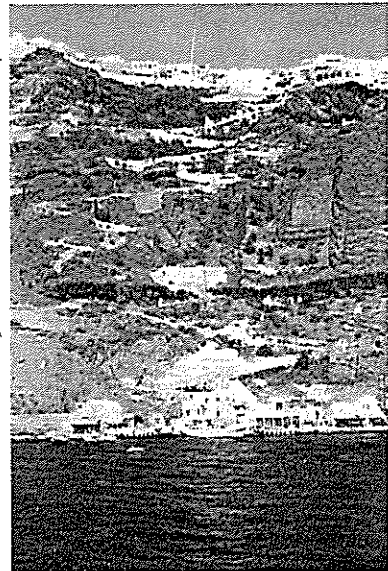
第2図 デロス島のイルカのモザイク

ス (Knossos) 宮殿の調査も計画したが、当時の事情からうまく捗らず取止めた (古代への情熱 133p)。その後エバンス (Sir Arthur John Evans 1851—1941) は1881年アテネにシュリーマンを訪ね、そのコレクションを見て刺激され、クレタ島に関心に向け、1900年から1908年にかけてクノッス宮殿の発掘を行い、宮殿跡の全貌を明らかにした。彼は発掘したのち、旧状に復元する作業を行ったので遺跡にはかなり手が加えられている。

クレタ島はエーゲ海の南端にあり、地中海で5番目、エーゲ海では最大の島で東西245kmもある。島の北岸中央にあるギリシャで5番目の都市イラクリオン (Hērakleion, Iraklion) は長い城壁が市を取巻いている。クレタ島では新石器時代ののち BC 2600年頃からミノア文明 (Minoan civilization) といわれる銅器時代に入り、BC 2000年頃からクノッス、フェストス (Phaistos)、マリア (Malia) に壮大な宮殿



第3図 サントリニ島とアナファイ島 (Mediterranean Aegean Sea, Greece-South Coast, Defense Mapping Agency, Hydrographic Center, Washington D. C.)



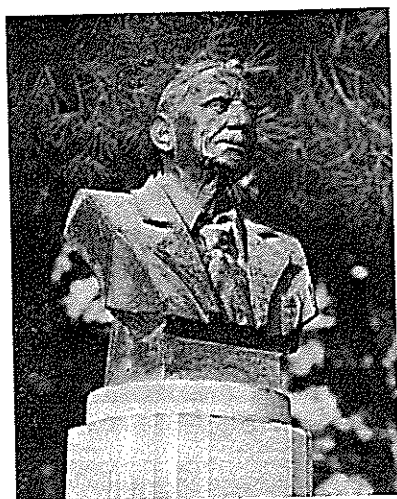
第4図 沖合より見たサントリニ島 (著者写す), 右上) 山腹に見えるジクザクした線は石の段々で、これをロバに乗って上る, 下) 沖合よりの展望

が建てられ、華麗な文化が開花した。BC 17 世紀には、クノッス王権の下に全島が統一されたが、BC 1400 年頃侵入者により破壊されエーゲ文明の中心はギリシャ本土のミケーネに移った。また BC 1450 年頃サントリニ島の火山噴火とそれによって生じた津波のため滅亡したともいわれる（三好，1978）。

イラクリオンの東南約 5km にあるクノッス宮殿の出土品は全て同市の博物館に集められている。宮殿は 5 階まであり、全体で 3,000 の室があったといわれる



第 5 図 サントリニ島の West House より出土した漁夫のフレスコ画（アテネ国立博物館蔵）

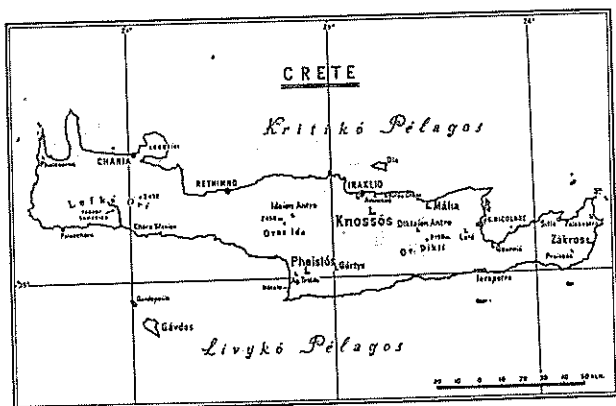


第 8 図 クレタ島クノッス宮殿前にあるエバンス胸像（著者写す）

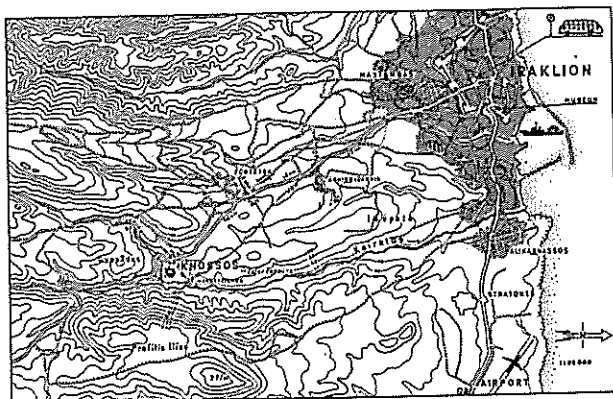
がその一つ女王の間の壁にイルカの絵が描かれている。この絵は背ビレを除いては正しく書かれている（イルカと人間 25p）。原因は発掘の際に発見されたフラスコ画で現在ヘラクリオン博物館の 2 階に展示されている。それは宮殿の絵を 3 等分した中央と右方の図と殆んど同じである。宮殿の図の上・下方には栗の毬のようなものが描かれているが、近寄って見ると、ウニのように見える。

クレタ島の東北方、トルコの沿岸近くにあるロードス (Rhodos) 島の北端にあるロードス港は城内の旧市街と城外の新市街に分れ、港は中世末期に聖ヨハネスの慈善騎士団がこの島を支配したときに築いたものである。この島の東南岸にあるリンドス (Lindos) は宗教上の中心地として栄え、岬の突端の岩山の上にあるアトロポリスは慈善騎士団により城塞化された。その外門を過ぎ城内に入る長い階段の途中の岩壁にある三段櫓船の浮彫は、長さ約 4.5m、高さ約 5m あり、船尾は弓なりに弧を描いて宙に突き出している。

ロードス島の西北 100km 程にあるカリムノス (Kaly-



第 6 図 クレタ島



第 7 図 イラクリオン市とクノッス宮殿遺跡 (Knossos 48p)

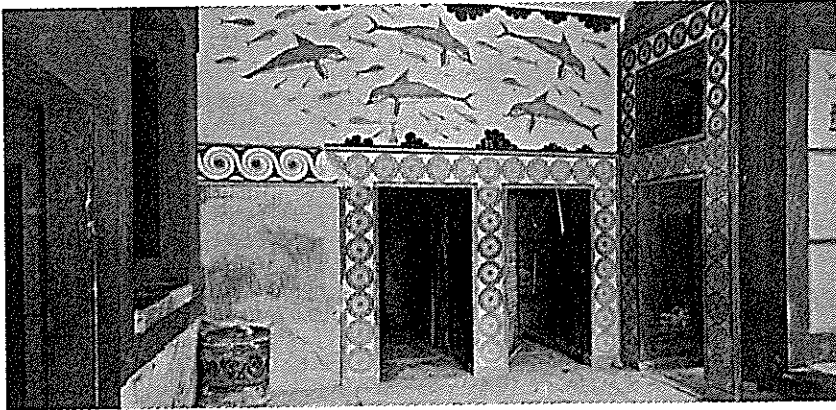
mnos) 島は海綿の産地であるという、アテネ市内でも海綿の立売りをしているが、中には大きさが30cm近いものもある。

ロードス島から東北方を望むとすぐ前にトルコの沿岸が見える。このエーゲ海に面した海岸線の中ほどに同国第3位の人口を有するイズミール (Izmir) 市があり、その少し南に古くはエフェソス (Ephesos) といわれた Efes がある。この遺跡は2の丘の間に発展した町で今でも大理石の柱が立並んだ廃墟が残っており、現在では海岸からかなり隔っているが、昔は近くまで海であったらしく遺跡の近くに昔の港の跡がある。(第13図)

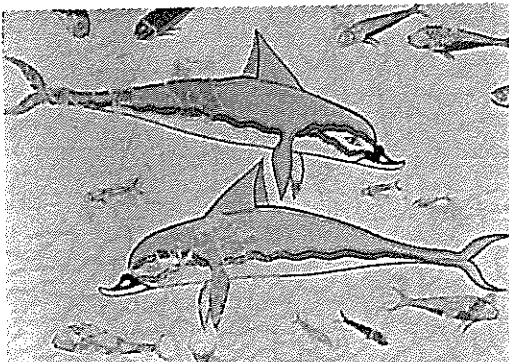
この町の博物館に大きさ約2m 平方のモザイクがあり、それにはイルカが描かれている(写真も写したが失敗したのでここに示せない)。また遺跡のクレタ

(Cureta) 通りにあるトラヤヌス (Trajan) の泉から出土したという青銅製の長さ約30cmのイルカの像がありこれはローマ時代の遺品であるという(第12図)。ギリシャ神話の Eros はローマ神話の Cupid に当るが、このイルカの像の背に Eros が跨っている。大村所長の「イルカと人間」にもエフェソスの南方のミレトス (Miletos) で、イルカが人間に感謝した話と、少年とイルカが友だちになったイアソス (Iasos) での話が載っている。

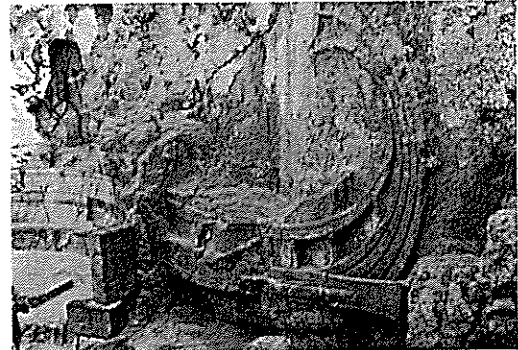
Efes の少し南にある港町クサダス (Kusadas) は、すぐ前にピタゴラスが生まれたというギリシャ領のサモス島が見え、町にはキャラバン・サライ (隊商宿) を改造したホテルがある。ここはシルク・ロードの終点の一つで、ここから海路でヨーロッパに物資が流通していたのであろう。



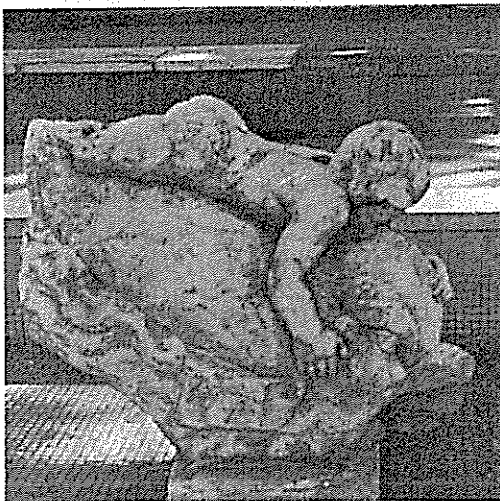
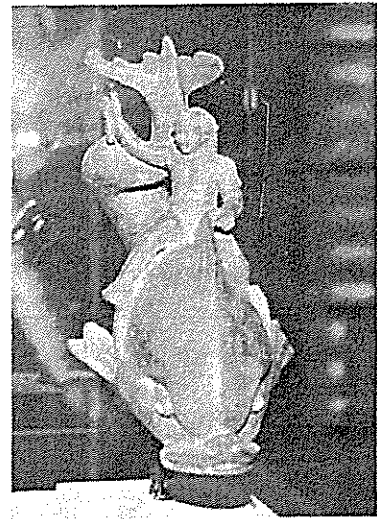
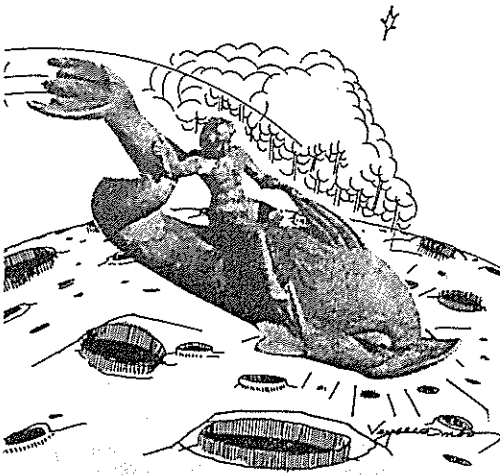
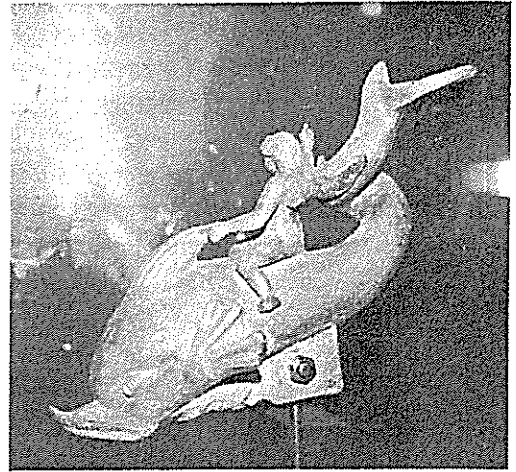
第9図 クノッソス宮殿の女王の間のイルカの壁画



第10図 出土したイルカのフレスコ画を補修した図(原因では所々に斑点状の所がある。これが本来のフレスコ画の残存した部分と思われる。大きさは約新聞紙大。BC 1600年頃の作品)



第11図 リンドス遺跡にある三段檣船の浮彫(著者写す)



第12図 イルカに跨ったエロス
 左上) Investigations on Cetacea (Ed. by G. Pilleri) Vol. 8, 1977 の表紙カラー写真, アテネのアクロポリス出土, BC 5世紀, エフェソス博物館のものに酷似
 左中) エフェソス博物館のエハガキに依る
 左下) エフェソス博物館の庭にある彫刻

右上), 右中) エフェソス博物館展示品
 右下) 左上と同じく Vol. 9 1978 表紙, エフェソス出土

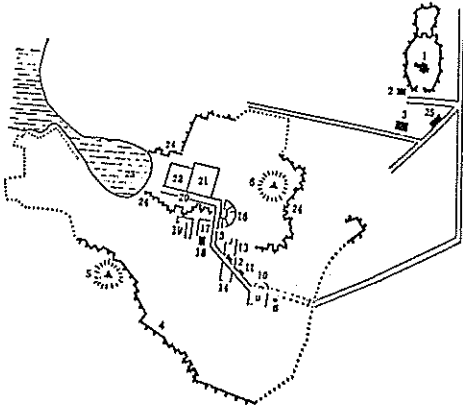
左上と右下は Pilleri 氏の, また左下と右上と右中はこれを撮影した国立公園協会, 千家啓磨氏の許可を得て掲載した。これら5点は大村所長の御好意により引用できたものである。

イズミールから北上するとベルガモン (Pergamon) などの著名な遺跡があるが、ここでは関係がないので省略し、更に北上すると有名なトロイ (Troy) の遺跡に達する。語学の天才であり、藍の取引などで巨万の富を蓄えたシュリーマンは、ホーマーのイリアードに書かれているトロイが実在したものと信じ、今から約百年前に単身この地で発掘を行い、遂に黄金の首飾りなどを発見した。幼時を貧困の中に過した彼は殆んど

正規の教育を受けなかったので、その発掘の仕方は、単に古代の遺物を発掘することだけに努力を集中したため、今日の考古学上の立場から見ると極めて乱暴な方法であったと非難されるが、それまで何人によっても行われなかった遺跡の発掘を独力で成し遂げたことは立派なものである。

この遺跡は9層に分れ、シュリーマンの発見した「ホメロスのトロヤ」は第6層に当たるとされていたが、後に精密な調査が行われ、第7層であることがわかった (古代への情熱 199p)。現地は小高くなった廃墟を処々掘り起し、昔の石壁が表われているが、素人目には興味ある所ではない。

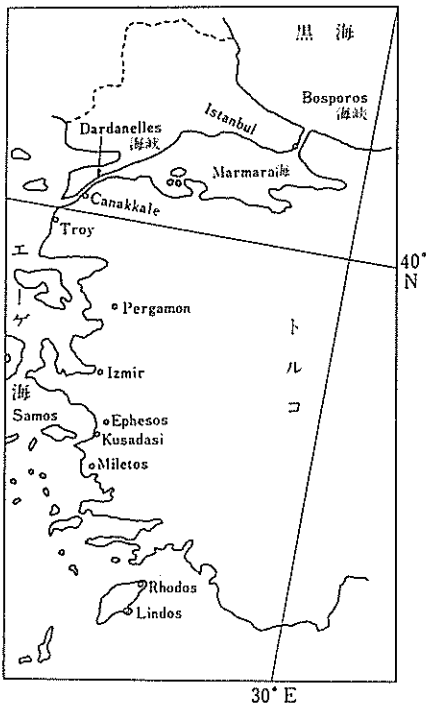
トロイ (Troy) は Troja (独), Troie (仏), Ilion (Gk.), Ilium (L.), Truva (土) などと書かれるが、トロイの攻防戦を歌ったホーマーのイーリアス (Iliad (Ilias, Gk.)) は10年に亘るトロイ攻防のう



第13図 エフェソス遺跡図, 11はトラヤヌスの泉, 23は港, 25は博物館 (丹生谷 146p. 66図)



第15図 トロヤの遺跡 (著者写す)



第14図 トルコ西部, エーゲ海沿岸主要地名 (Samos 及び Rhodes 島はギリシャ領)



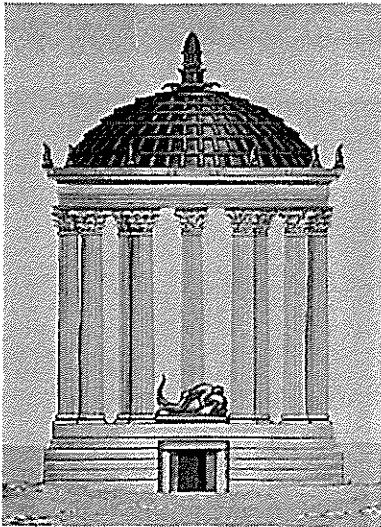
第16図 トロヤ遺跡の木馬 (説明本文, 著者写す)

ち10年目のわずか数十日の内の事件を扱っているにすぎず、これに先立に物語も、その後の発展も共に聴衆が知っていることを前提としている。これら前後のトロイの物語はその後の詩人によって取上げられ、オデュッセイヤと共にトロイ物語を歌った一群の叙事詩、キユブレア、小イーリアス (Iliasmika, 4 巻, レスボス

のレスケース作) などがあったが今は失われた。小イーリアスの末尾には『ギリシヤ罪が巨大な木馬を造



第17図 海の神様ポセイドン Poseidon [ギリシヤ神話], ローマ神話の Neptune に当る。



第18図 ギリシヤ神話に出てくる Thebes の王 Athamas とその妻 Ino の子 Palaimon の死体はイルカの背に乗って Isthmia の近くに打上げられた (Papahatzis. 35p)。



第19図 上, 中) コリントの Isthmia 神殿のローマ浴槽で近年発見された床のモザイク。Triton と Nereides 並に 3 枚の絵の各左手にイルカが見える (Papahatzis. 38—39p)。

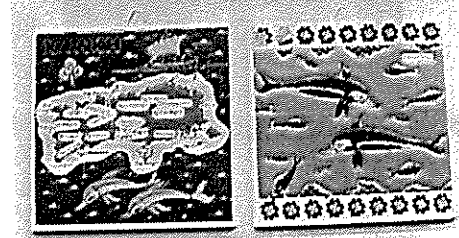
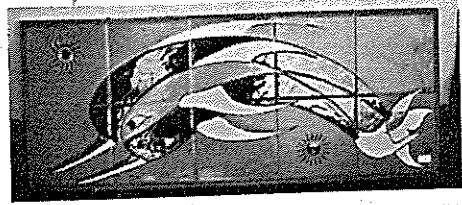
下) 西暦79年の Vesuvius の噴火で埋没した Naples 近くのローマ時代の都市 Herculaneum の婦人浴場 (Women's Thermae) の床のモザイク, 中央のトリトン Triton を囲んでイルカ, ポリブ polyps, うつぼ (morays, うつぼ科の魚, 地中海地方では食用として珍重される) が見える (Brenner and Pilleri 1977, Plate 4)。

り、その中に武装した勇士を隠し、これを城外におき、自分達は陣営を焼き払って、船を海に出した。これを見たトロイ側は戦が終わったと思い城壁の一部を破壊して木馬を城内に引入れた所、夜になって木馬に隠れていた勇士が躍り出で味方を城内に導いたため城が落ちたという』有名な話が載っている（呉・高津訳、ホメーロス 491p 解説、及シュヴァーブ（II）、258～木馬の項）この有名な木馬の複製が遺跡の入口においてある。

トロイを過ぎて更に北上すると、アジアとヨーロッパの境界であるダーダネルス海峡のアジア側にあるキャナカレ（Canakkale）という町に着くが、ここから小さなフェリーで対岸の Kilithir までは 30 分もかからずに着く。フェリーが対岸に着く直前、何か海の中で泳いでいるものがあるのでよく見ると 2 頭のイルカであった。前にエーゲ海を 3 日ばかり巡航したときには一度もイルカを見なかったのに、こんな所でお目にかかれるとは意外であったが、チャナカレで泊った Truva Hotel の前庭にもイルカの像があったし、エーゲ海一帯の遺跡からの出土品にイルカに関するものいろいろあることから、イルカがこの地方の人々に親しまれていた動物であることがわかる。

最後に直接見ることができなかつたものを含め、案内記、絵ハガキ、各種報告などに載っているイルカに

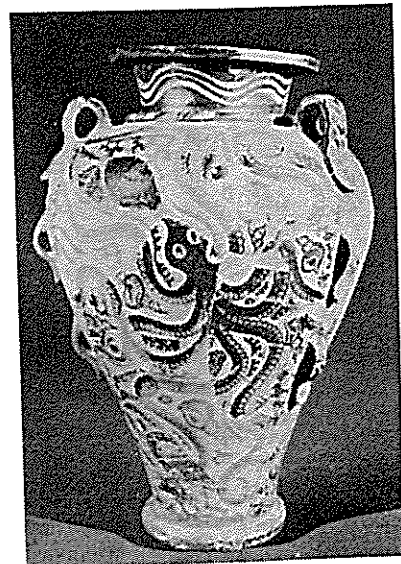
関係ある遺物と、それ以外の水産動物に関する写真などを示す。



第21図 ロードス島の土産物店で売っている、イルカとタコのタイル。



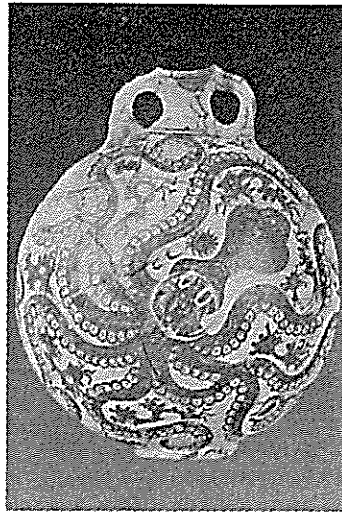
第20図 トビの図（イラクリオン博物館 下：原図、上：修正した図）



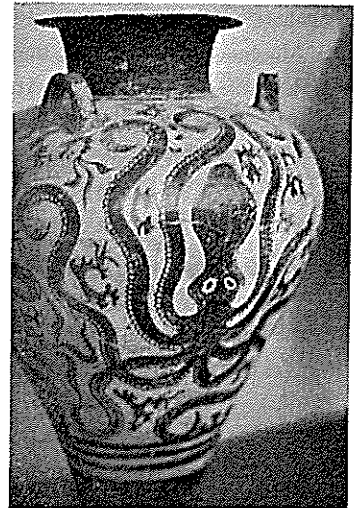
第22図 タコの絵のある壺 ヘラクリオン博物館 BC 1450年頃



第23図 多彩のピトス(大甕)
Phaistos 第1宮殿跡出土、
ヘラクリオン博物館 BC
2000—1700年頃



第24図 タコの模様のあるフラスコ
クレタ島東端 Palaikastro
出土, 28cm, BC 15世紀
ヘラクリオン博物館



第25図 タコの絵のある壺, アテネ
国立考古学博物館

文 献

旅行案内

ギリシャとエーゲ海, 実業の日本社, ブルー・ガイド
ドブックス編集部 1977, 344p.

ギリシャ, 日本交通公社, 海外ガイド 21, 1976,
159p

イルカ

大村 秀雄 1978. イルカと人間——その文化史——
海洋出版 K. K. 130p.

Investigations on Cetacea Vol 8, 1977, 383p
(Edited by G. Pilleri, Institute of Brain
Anatomy, University of Berne, Switzer-
land)

295—303p: Brenner, G. and Pilleri, G. The
dolphin in ancient art and liter-
ature, with Plates 1—6

305—322p: Kraus, C., Gühr, M. and Pilleri,
G. The dolphin in Swiss art
from Roman Era to the present
day, with Plates 1—8

ホメーロス

ホメーロス 1964. 世界古典文学全集(筑摩書房)

1. 奥 茂一, 高津春繁訳, 505+25p.

シュリーマン 村田数之亮訳 1976. 古代への情熱
——シュリーマン自伝——岩波文庫 改訳版

201p.

ルートヴッヒ 秋山英夫訳 1978. シュリーマン
——トロイア発掘者の生涯——白水社 208p.

シュヴァーブ 角 信雄訳 1970. ギリシャ・ロー
マ神話, 第2冊, 白水社

ロバート・ペイン 高津久美子訳 1960. トロイア
の黄金, 世界ノンフィクション全集10(筑摩書
房) 3—198p (全訳に近い抄訳) (R. Payne,
The gold of Troy)

エーゲ文明

シンクレアー・フッド 村田数之亮訳, 1970. ギリ
シャ以前のエーゲ世界, 創元社, 142p (S. Hood,
The home of the Heros, Thames and Hud-
son, London, 1967.)

村田数之亮 1979. エーゲ美術 中公美術出版

三好 寿 1978. エーゲ文明滅亡の原因としての津
波 東京水産大学論集, 13, 29—40

Pararas-Carayannis, G. 1973. The waves that
destroyed the Minoan Empire, Sea Front-
iers, 19 (2), 94—106

ソニア・ディ・ノイホフ: ミノス文明とクノッス
宮殿 (訳者, 発行年不明, 12×16.5cm)

(Neuhoff, Sonia di: Minoan civilization
and Knossos Palace, 出版社 E. Tzaferis A.
E. Fokion Negrin 52, Athens, Appllo Edi-
tions)

- Papahatzis, N. 1977, Ancient Corinth, The Museums of Corinth, Isthmia and Sicyon, Ekdotike Athenon S. A. Athens 112p.
- 馬場恵二 1966. 迷宮クノッソス 埋れた古代都市
4. 西欧文明の起源 集英社
エーゲ文明の美術 週刊朝日百科, 世界の美術23,
1978
- ビェール・ドマルニュ 村田数之亮, 高橋たか子訳
1966. ギリシャ美術の誕生 新潮社 475p.
- Mrs. Sosso Logiadou-Platonos (Supervision of Texts): Knossos, The Palace of Minos, A survey of the Minoan civilization and a guide to the Museum of Heraklion. 出版社 Chr. Mathioulakis & N. Gouvoussis, Athens 1978, 48p.
- St. Alexiou, The Minoan civilization, Heraclion, 2 ed. 1968.
- Andronicos, M. Herakleion Museum and Archaeological Sites of Crete, Ekdotike Athenon S. A. Athens 1977, 56p.
- Andronicos, M. National Museum, Ekdotike Athenon S. A. Athens 1978, 96p.

ぶ っ く す

- 1) Sprague, J.G., N.B. Miller and J.L. Sumich. 1978. Observation of gray whales in Lagune de San Quintin, northwestern Baja California, Mexico. J. Mamm., 59(2):425-427.
- 2) White, S.B. and H.J. Griese. 1978. Note on lengths weights, and mortality of gray whale calves. J. Mamm., 59(2):440-441.
- 3) Perkins, J.S. and P.C. Beamish. 1979. Net entanglements of baleen whales in the inshore fishery of Newfoundland. J. Fish. Res. Bd. Canada, 36(5):521-528.
- 4) Gerace, J.R. and D.J. St. Aubin. 1979. Tissue sources and diagnostic value of circulating enzymes in cetaceans. J. Fish. Res. Bd. Canada, 36(2):158-163.
- 5) Duinker, J.C., M.Th. J. Hillebrand and R.F. Nolting. 1979. Organochlorines and metals in harbour seals (Dutch Wadden Sea). Marine Poll. Bull., 10(12):360-364.
- 6) Best, P.B. and P.D. Shaughnessy. 1979. An independent account of captain Benjamin Morrell's sealing voyage to the southwest coast of Africa in the Antarctic, 1828/29. Fish. Bull. S. Afr., 12:1-19.
- 7) Leatherland, J.F. and K. Ronald. 1979. Thyroid activity in adult and neonate harp seals Pagophilus groenlandicus. J. Zool. Lond., 189(3):399-405.
- 8) Anderson, S.S., J.R. Baker, J.H. Prime and A. Baird. 1979. Mortality in grey seal pups: incidence and causes. J. Zool. Lond., 189(3):407-417.
- 9) Ross, G.J.B. 1979. Records of pygmy and dwarf sperm whales, genus Kogia, from southern Africa, with biological notes and some comparisons. Ann. Cape Prov. Mus.(nat. Hist.) 11(14):259-327.